

倫理 第27回 西洋近代思想(2)「人間の尊厳① ルネサンスと宗教改革」

○今回のポイント

0. 人間の尊厳

真の意味での自己の尊厳とは何か。

人間の尊厳が軽視されると起こる問題点	人間の尊厳が過度に強調されると起こる問題点
人種・民族差別、他者の人格・生命の軽視	・人間中心主義…自然を単なる操作対象となる ・自己中心主義…他者への配慮を欠く

1. 自己肯定の精神

1-1.ルネサンスとヒューマニズム

(1)【①】 (文芸復興) …本来は「再生」を意味する。

ギリシア・ローマの古典文化の復興を目指した改革運動。

→人間性の肯定。自己の生き方や求めるべき価値を、みずからの理性や感情によって決める。

→「古代ギリシア・ローマの学問芸術を再生させることによって、中世の神中心の文化から個人を解放し、個人としての人間の自覚に基づく、豊かな人間性に満ちた人間中心主義の文化を生み出した」

(2)【②】 …直訳すると人文主義。

→ギリシア・ローマの古典に人間性の典型を求め、古典文学を学ぶことを通して人間性を回復しようとする。

(3)ルネサンス期における具体的な人物たちの活躍

・【③】 『神曲』

少女ベアトリーチェに生涯にわたる精神的な恋を抱き、それを宗教的に高めて『新生』や『神曲』を描いた。永遠の少女への愛が人間の魂を浄化し高める。『神曲』では皇帝や教皇を批判し当時のイタリアの腐敗を描いた。また天国への導き手としてベアトリーチェを登場させることで、信仰や正義や善を通して人間の魂を浄化する救済の道を説く。

・【④】 『カンツォニエーレ』

永遠の恋人ラウラへの愛を、言葉の持つ美しい音楽的な響きを生かした流麗な格調で歌い、近代的な恋愛感情を新鮮に表現した。

・ボッカッチョ(【⑤】) 『デカメロン』

デカメロンとは「十日」のこと。ペストの流行を逃れてフィレンツェ郊外の別荘にこもった10人の若い男女が毎日1つのテーマで10日間するという筋立て。肉欲の解放などルネサンス精神に溢れている。

・【⑥】

人物の姿をデフォルメして理性的な美と調和を追求し、甘美な叙情性にあふれる作品を描いた。『ヴィーナスの誕生』はギリシア・ローマの女神など古典的テーマを扱っている。

・【⑦】

芸術・技術・科学などあらゆる分野で才能を発揮する万能人。「最後の晚餐」や「モナリザ」で有名。よくミケランジェロの「最後の審判」とひっかけ問題がだされる。

・ [⑧]]

彫刻「ダヴィデ像」や絵画「最後の審判」で有名。「最後の審判」が世界の終わりに復活したイエスが人間を裁いて天国と地獄に振り分けている。

・ [⑨]]

倫理の教科書の表紙でお馴染みの「アテネの学堂」を描く。優美な聖母像は有名。

1-2.新しい人間観[ピコ]

・ [⑩]] 『人間の尊厳について』

人間が自由意思によって自分の進むべき道を選択し、自分自身を形成する⇒「人間の尊厳」の根拠！！

・ [⑪]] …あらゆる外的要因の影響を受けずに、自由に自己の意思決定ができること。

ルネサンス期には、中世の宗教的束縛から解放され、自由意思によって何事でも成し遂げ、自己を高めて完成させる万能人が理想とされる。ピコ=デラ=ミランドラは自由意思によって自己の形成者となれるとして、自由意志を肯定した。

cf. [⑫]] 『君主論』 ※よくホブズと間違うので注意。

イタリアの統一国家を目指し、独裁君主が権力を獲得し、維持する方策を論じる。政治を、利己的な欲求を持つ人間の相互の間に人為的な秩序を作る営みであるとみなす。キツネとライオンの比喻は有名で、キツネのずる賢さとライオンの威圧的な力は必要であると説く。このような人を欺く権謀術数を「マキャベリズム」という。

2. 宗教観の転換

2-1. 真の信仰へ [⑬]]

(1) 腐敗した教会と聖職者への批判

a. 教会の腐敗…聖職売買、聖職者の妻帯。免罪符([⑭]] : 買えば罪が許されるとする符)の乱売。

b. 真の信仰とは何か? 信仰に生きる人間の在り方、生き方の模索

例) [⑮]] 『ユートピア』; 国王の離婚問題によるイギリス国教会の成立に反対し刑死した。

c. ルネサンスのヒューマニズムの影響→清貧の実践と聖書研究。信仰を個人の内面からとらえようとする。

例) [⑯]] 『痴愚神礼賛』: 聖書や文芸の研究に従事し、当時の王侯貴族や司祭を熱烈に批判。

d. ルター登場。宗教観の転換を推進する。

(2) ルターの宗教改革

a. 教会批判から始まる宗教改革

・ 聖書と信仰を中心とするキリスト教の根本精神に立ち返る

・ 1517年「 [⑰]]」を公表。贖宥状を乱発する教会と教皇を批判。破門されるが宗教改革。

b. ルターの主要思想・業績

☆ [⑱]] …罪からの救いは教会の説く善行にあるのではなく、神への信仰のみであるという考え方。

☆ [⑲]] …信仰の拠り所は教会にあるのではなく、聖書のみにあるという考え方。

☆ [⑳]] …信仰を持ち聖書を拠り所とすると神と直接対話ができ、信仰者は全て司祭となるという考え方。

☆ [㉑]] …職業を神によって召された使命として考える思想。ルターは職業に神の召命としての意義を与えた。カルヴァンは世俗的職業は神の栄光を実現するために人間が奉仕する場であるとして、より積極的に意義づけた。

☆ 聖書のドイツ語訳…聖書の一部特権階層の独占を解放。教会や司祭によって救済にあずかるという中世的な宗教観を覆す。